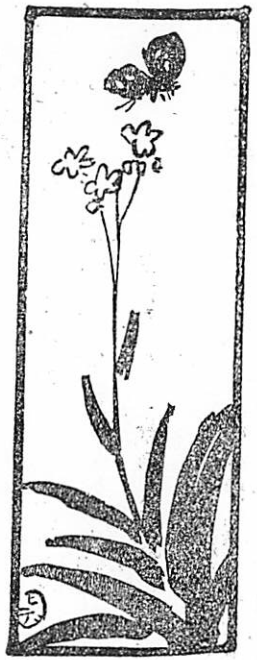

暗い叔母さん

永代美知代

「花姉ちやん、暗い叔母さんはまだ歸つて來ない？」

分家の次郎ちやんがお廊下を駆けて來ました。花枝さんは吃驚して、もつとでお庭へ轉がりさうになりました、何故と云つて、花枝さんは恰度今、お縁側に腰を掛けたまゝ、いろんな事を考へて、夢中になつてたところですもの。

「嫌よ次郎ちやんは、突然にそんな大聲を出したりして、吃驚するぢやないの。」

「だつて僕、暗い叔母さんは？　ねえつてば、まだ歸

つて來ないの？」

「暗い叔母さんつて誰？　姉ちやんはそんな人知らなくつてよ。」

「暗い叔母さんさ、ねえ花姉ちやん、叔母さんは今日東京から歸つて來るんだねえ。」

「そんなら美彌叔母さんて仰有いよ、暗い叔母さんだなんて、そんな不氣味な、嫌なお名前ぢやないわ。」

「だつて僕、暗い叔母さんだい。」

次郎ちやんは突然驅け出して行きました、取り殘された花枝さんは、一人居るのが何だか怖いやうな氣がして來ました。

實際次郎ちやんの云ふ通り、美彌叔母さんは、何故か年中薄暗いお部屋が好きでした。

「花ちやんや、一寸お裏へ行つて、美彌叔母さんを呼んで來て頂戴。」

母樣から斯う云ひつかつて、花枝さんが怖々、長いお廊下傳ひに、裏座敷へ來て見ますと、何時でも定つてお座敷に美彌叔母さんのお姿は見えません、廊下を又鍵の手に廻つた湯殿の隣りのお化粧部屋を、御自分の書齋のやうにして、始終其處で御本を讀んで被在います、中へ入らうと思つて、襖に手を掛けますと、叔母さんは定つて斯う仰有います。

「誰？　入つちや嫌、叔母さんは今御勉強だから入つちやいけません。」

「だつて叔母さん、私だわ、花枝さんよ。」

花枝さんが甘つたれながら、無理と入りかゝつた時叔母さんのお机の据つた窓の向ふのお庭の方で、何だか知らないがガサガサ音がしました。

「アラ！　叔母さん！」

「だからおよしなさいつて云ふのですよ。」

美彌叔母さんは吃驚して驅け寄つた花枝さんを抱きしめて、仰有るのでした。

「御覽なさい、お庭の隅にお藪があるでせう、お藪の中にはね、大きな蛇が居ますのよ、やかましく云つて騷ぐとね、すぐ出て來るの。」

「何處へ？」

「此處へねえ、にゝよろ〳〵這ひ出すの。」

「まあ！」

花枝さんは又、叔母さんにしがみつきました。

「ナニね、怖がらなくつても可いわ、その代りもう度々此處へ來たがるんぢやありませんよ、此處はねえ、蛇二疊だから、蛇の出るお座敷だからね、解つたでせう。」

花枝さんがコックリをして見せますと、叔母さんは突然頬摺りをなさいました。それからはもう、花枝さんは御飯の御案内に來ましても、御風呂をさう云ひに來ますにも、何時でも襖の外から聲をかけます。

「美彌叔母さん、母樣が御用ですつて！」

「はい〳〵有難う、御苦勞樣！」

叔母樣は直ぐ出て來て、歸りには屹度花枝さんを負んぶして下さいます。

「大きな人を何でせうね。」

誰かが斯う云ひますと、叔母さんは直ぐ、

「だつても可愛いんですもの」と、澄してらつしやいます。何か考へ事をしてらつしやる時だの、御本を讀

んだり、書きものをしてらつしやる時は、本當に恐いお顏をして、一寸ふざけ掛つても、直ぐもう白い眼をお見せになりますが、花枝さんを誰よりも一番可愛がつて下さる方は？　と訊いたら、花枝さんは、母さんでも無い、お祖母樣でも無い、美彌叔母さんだわ、と申すでせう、全く甚く可愛がつて下さいます。

「美彌さんは花枝さんにかけては、もう目がないんだね、何だつて惜しいものはないと見える！」

母さんまでが斯う仰有る程です、帶でもお召物でも、下さいと云つたら、何でも下さいます、ですけれども、花枝さんがたつた一つ丈け、美彌叔母さんを恐いと思ふ事がありますの。

それはねえ、蛇二疊に被在る事も怖いには怖いのですけれど、それよりも、もつと怖いのは美彌叔母さんが、魔法使ひのお婆さんと知己で被在る事です。

「花枝さん、そんなおいたをすると、今に片眼の兎にしちまひますよ。」

斯う云はれると、花枝さんはもう一縮みです！嫌々をして駄々をこねたりなんぞ、些少でも出來なくなるのです。ですが一度だけ花枝さんが餘り云ふ事を聞かなかつたものですから、危く人面獸身にされかゝつた事がありました。

「ソラね、お尻を觸つて御覽なさい、何か突き出かゝつたものがあるでせう、それはねえ、お猫だの犬のやうに、尻尾が出かたつたんだすよ。」

花枝さんが、そつと手をやつて見ますと、骨かとも思はれますけれども、全く何だか突き出かゝつて居るやうです。

「アラ叔母さん、堪忍！」

突然泣きつきますと、叔母さんは嚴いお顏をなさりながら仰有いました。

「一度なつたらばね、どうしても治りつこはないんだけれど、餘り可愛さうだから、今度だけ魔法のお婆さんにお願ひして堪忍して貰つてあげませう、ね。」

叔母さんはお庭から白薔薇の花を摘んで被入いました、花枝さんのお頭へ載せて、何か知ら御呪文をお唱へになりましたが、

「サア、もうよくなりました。」と莞爾お笑ひになりました。

花枝さんはそれつきり片眼の兎にされたり、人面獸身になつたりするやうな、おいたは致しませんでしたが、美彌叔母さんは間もなく東京へ學問に被入いました。

お留守の間に花枝さんは、おとなでばつかり居たでせうか、母樣がしてはいけないと仰有る事をしないで、全く好い兒でばつかり居たでせうか。

美彌叔母さんは今日愈〻東京からお歸りになりますの。

花枝さんは早くお目に掛り度いやうな、怖いやうな、氣が揉めて堪りません。

「私白薔薇の花を摘んで置きませうかしら。」

云ひながら花枝さんがお庭へ降りますと、黃色い美女柳の彼方に、眞白な白薔薇が一杯咲き揃つて居りました。花枝さんは、殆で魔法の國のお庭へ行つたやうな氣がして、思はずゾッと身震ひを致しました。

（をはり）